矢野島に関する知見

佐　藤　茂　樹

1. 真浦から矢野島まで

真浦では小船の舷側に吊した網の生簀にアナゴ、ハマチ、アイナメ、タコ、クルマエビなど別々に生かして置くのが面白い。快速艇で緑の山影を写した海上をすべるように進む。右手間近かに家島神社の原始林を眺めて岬をまわると男鹿島の花崗岩が、白味勝ちな岩肌が眼を射るようにきらめく。家島本島の古生層の砂岩は黒味が強く深緑の樹林、浅緑の草原と色の対比が美しい。突こつたる岩壁の所々に釣糸を垂れる太公望の姿も風情を添えている。

奥村組採石場は大規模で男鹿島の花崗岩と共に家島群島の大きな地下資源であることを物語っている。この辺は流紋岩で白味が強く、頂から急斜をなして碧海に裾をひたす様子は極めて豪壮な眺めである。船首を西に向ける頃前面に待望の矢野島が絵のように浮び上ってくる。さらに前方にに坊勢島が横たわっていて多島海の様相を示す。

2. 宝を秘めた矢野島

(1) 上陸地第一印象

快速艇から繰り降ろされた臨時の桟橋を渡って汀に立つ。100m 未満の砂浜ではあるが汀線に添って2段3段に貝類の美しい波状の層が断続する。購、貿…財宝に関する文字には貝が使われている。この島と貝の多いことからも宝島の名がふさわしく、島内深かく秘められた宝は将来の発展策の如何にかかってるのかも知らぬ。試みに拾ったものだけでも巻貝36種、二枚貝18種であった。古川氏は終始採集されたからさらに多くを獲ている。

(2) 海岸の太陽巡り

古生層の砂岩、頁岩、珪質粒板岩の交層が明瞭で層がほぼ水平になっているのは比較的に変動の少なかったことを物語っている。（狭い面積的に）ツルナが美事に栽培植物のように生育している。ハマナデシコ、カワラヨモギが岩上僅かの土に根を下ろして生命力の偉大さを示している。マルバグミの花盛り、マサキ、トベラは実をつけている。北側は岩壁が急にそそり立ち行くてをはばんでいたので、満潮に帰路をたたれる心配もあるので引きかえす。

(3) 頂上への登攀

ヒメムカシヨモギに被われた冲積地の中央から急斜面によぢ登り、ビナンカズラが球状の実をつけている。サンカクズル、トキワアケビの蔓草が目立つ。タブ、カクレミノ、シロダモ、ウバメガシ、ヤブニッケイ、ヒサカキなどの常緑樹に交ってヌルデ、クサギなどがあり、ヤタケの密生地とせり合った形で遷移の段階がうかがわれる。頂部の穴から推測すると堆積土の土も相当あるように思われる。

3. 島の生物相

植物　陸上植物　室井博士ほか他の方々の研究が期待される。

海　藻　今はちょうど夏枯時なので、打ち上げられたのはホンダワラ、マメダワラの褐藻だけ、後日の研究に待つ。

動物　棘皮動物　バフンウニ、イトマキヒトデを見た岩礁が多い砂浜もあるから種類は多いものと思う。

甲殻類　ガザミ、ヒライソガニ、イソガニ、ヒメガザミの甲殻が打ち上げられていた。

サンゴ類　東さんが拾われたというサンゴは見ないので何か判らないがビリガライシは淡路に多いし、ノウサンゴ類は紀州に多い。

クラゲ類　バクチノキの自生した付近の汀に直径約50cm傘の扁平な縁辺に16個の弁片があり無色透明で水色、白色にも見える。ユウレイクラゲで瀬戸内海には特に群泳するというから、一大奇観を呈すると思う。

カイメン類　イソカイメンとワタトリカイメンの一片があった。後者は淡路島では30cmにも達するものがあるから、この海底にも相当あると思われる。

4. 海洋調査

海洋あっての島であるから、海水浴の面からも、生物群集の上からも是非一度調べておく必要があると思う。

5. 島の発展策

消極的ではあるが初めは健全な自然学習公園の性格で、開発なり設備なりを実施することが望ましい。

常緑樹は伐採を禁じ保護育成をはかる。タブ、ツバキ、ヤブニッケイ、カクレミノ、ウバメガシ、トベラ等、現在、ヒメムカシヨモギの繁生せる耕地跡には、スイセンの如きを栽培して冬季の収益をはかる。オリーブの栽培が提唱されたが賛成である。

なお、うるおいを与えるために、ビワ、ミカン類の栽植も行ってみたい。

生態、分布上などで面白いものには適当な解説を施して注意を喚起する。（例、バクチノキ）小学５・６年、中学生を標準にした趣味豊かな印刷物を作る。（伝説は簡潔に科学的記載を多く）

初め小人数のキャンプとして漸次拡大誘致を計る。水と便所の設備から。　（10月29日記佐藤）